

第 4 章

慈善活動における女性の参加

テオドーア・フリードナーとヴィルヘルム・レーエ

1

前提 女性がもっている信心の発見
協力の準備 - 協会の形での活動の可能性

19 世紀の初頭、公共の慈善に福音主義の女性の協力は全くなかった。それはカトリック世界教会の内部では、すでに 17 世紀に、恵み豊かに発展していた。フランスから始まった有名な慈悲の友会修道女の養成所はローマの諸地域に移された。それはドイツへは伝わらなかった。

[1]

いずれにしても、カトリック教会はいつも大きな可能性を発揮し、女性の心から出る宗教的特性をもって慈善活動を展開してきた。ルター教会はここでは難しかった。ルター教会は純粋な教理を重視した。教理の純粹性を守るための闘いは女性の切実な問題ではなかった。改革派教会はいつの時代も古代教会を標準的なものとし、1 世紀の使徒教会の体制に悩まされていた。しかし、古代教会において人の生全体に強い関心をもってディアコニッセたちと寡婦が行った奉仕は、どこに残っていたらうか？

敬虔主義とその後の信仰覚醒運動は、女性がもっている信仰の重要性を認めるようになった。またプロテスタントの中での男性優位の誤りを正すべきであった。このグループの本質をあらわしてきた聖書主義は、使徒時代の女性と女子の意義を擁護する方向に向かった。「キリスト教集会」は、信心深い女性の心情が新しく発展していく最適の苗床なえどことなった。「この地の穏やかな人たち」は、彼女たちの確信とキリスト教慈善の情熱的な力をもって、民に厳しく要求する使者と伝道

者をつくり出した。巡回説教者は集会から集会を巡り、さらに広い地域を旅してまわった。人々は一年の祝祭の時、至る所の集会に、説教壇や講演卓に集まってきた。だれでも家族のように思われた。罪と恵みを直接に体験する真の信仰体験について、女子と女性の世界も、男の世界と同じように、証しをし献げる喜びに目覚めた。フランス革命軍は、宗教的敵対関係を、中部ヨーロッパにひろめ、聖書信仰を離れた世界を好んで攻撃するようになった。一度は敬虔主義に特徴的な恵みの神への問いを満たしているので、一人の魂の救いは十分に重要な中心を占めていなかった。信仰覚醒の中心にいる女性と女子たちは神の国のために働く備えをした。[2]

女子と女性が犠牲と愛の力によって何ができるか、解放闘争の中で明らかになった。圧制者ナポレオンに反対する解放闘争は、兵士たちの間に故郷熱を長引かせた。女性たちは献身的に働いた。多くの町で後に残された兵士の看護のために、負傷者の世話のために、兵士の装備をする女性連盟がつくられた。戦争終了後、この女性の会はそのまま残り、病人、産婦、また貧しい人の世話をした。このすべてのことは複合的に働いて教会の慈善事業の中に女性が参入する備えをした。

人は組合の形をつくって新しい労働の可能性を試み、時代の困窮を通して団結を強めた。組合はその言葉の中に心を感動させるものをもっていた。そこではみんなに共通しているものが、責任・道徳と結びつき、理想とされた。また、時代に足りないものに取り組むことができた。たしかに検閲と警察国家と結社禁止法は発展を妨げていた。結社の目的が政府に安全と思われる場合にその発展は認められた。また、信仰に覚醒した後援者のグループが高級貴族や政府の役所の中にと、彼らの慈善を行う会も容易に認められた。1848年、革命の年、大きな解放がもたらされ、自由な会の活動が可能になった。[3]

女性の世界は目覚めていった。ドイツにおいても女性であり、母であるイギリス人クウェーカー教徒のエリザベス・フライは1817年「女受刑者のための女性の会」をつくり、多くの会員、後援者がいて寄付金を全国に供給し称賛された。11人の子どもの母である彼女は、1813年、ロンドンの門の前にある、重大な罪を犯した、受刑者のニューゲートを訪ね、劣悪な環境の中で道徳的に身を持ち崩した囚人の真中に歩み出ることを、初めてやってみた。彼女と共にニューゲートの奇跡が始まった。囚人たちは自分から状況を変え始めた。愛の力を持つこの女性がニューゲートの地下牢の中で何を変えたか、全英が耳をそばだてた。彼女は、地方から地方へ、監獄から監獄に呼ばれた。監獄改革は道を開いて進んだ。「刑罰は報復であってはならない」と彼女は言った。有罪判決を受けてオーストラリアの流刑地に追放される人たちを乗せた犯罪者の船にも、エリザベスは平和と秩序と慰めをもたらした。エリザベス・フライは何度もドイツに行き、ベルリン、ブレーメン、ハノーバーで講演した。[4]

ドイツでは先駆的な行動をするアマリエ・ジーヴェキングが先頭を行った。彼女は1831年「ベルゲドルファー・ボートン」で、キリスト教の女性と女子をハンブルクに集め、コレラの出現の時には看護の協力を申し出た。誰も報告しなかったが、1831年12月13日コレラの病院で奉仕したことだけは報告され、そこで、彼女は伝染病がなくなるまで看護した。医者はまもなく病院内の指導をそっくりそのまま彼女に委ねた。伝染病が終わったあと、小さな「救貧と看病の会」が創設され、それは女性の病人と貧者を訪問する会となった。ボランティアたちは誇りを持ってその仕事を受け継いだ。[5] 女性の団体は、シュヴェスター[修道女]の慈善を模範としていたが、実現しなかった。[6]

女性ディアコニーの先駆者、カイザースヴェルトの
テオドーア・フリードナー、教会共同体をめぐる

彼女たちの戦い - オランダとイギリスの大きな予備学校

だが、テオドーア・フリードナーは女子や女性の世界が公共の慈善活動に参入するのを引き止めようとするあらゆる制限を、ニーダーラインの小さな町カイザースヴェルトで打ち破ることに成功した。ここ、女性の協力者の地域で19世紀に画期的な出来事が起こった。

タウタヌスの山地の南斜面にあるエプシュタインの出身、父の職業をついだ牧師の子テオドーア・フリードナー(1800-1866)は、最良の条件をもっていた。彼は非常に才能があり、鉄のような神経と強い意志をもっていた。理性的な冷静さと卓越した組織化の才能は、驚くべき無欲さと結びついていた。彼は自分自身に厳しく、人を楽しい気分にする合理主義者であった。よいことをして隣人を助けようとする熱烈な願いをもっていた。[7]

経済的苦境によって変わってしまった、人里を離れた、とりわけカトリックの小さな町、カイザースヴェルトで、彼は1822年、子どもを含む合計200人足らずの小さな福音主義移民共同体の人たちを引き受けた。ここで、前任者たちはかろうじて生きている貧しい共同体のために募金をしていたにちがいない。かつて共同体の多くの人々はパンを与える人であった、その織物工場が解散したとき、フリードナーも同じようにこの道を歩かなければならなかった。フリードナーは19世紀のもっとも偉大な募金家となった。

彼は始めの頃の引っ込み思案はなくなっていた。彼はヴッパータールとニーダーランドを惜しみなく巡り歩き、オランダとイギリスを渡り歩いた。紹介状はニーダーランドで、彼を助けて先に進ませてくれた。彼は募金したお金をオランダの国債証書に投資し、アムステルダムの大名簿に記名されるほど信頼を受けるようになった。苦い思いが彼にないわけではなかった。だが、14ヵ月後に、彼は21万ターレルを集め、その利子はカイザースヴェルトの共同体の存続を確かなものにした。この成功は可能性としてのみあった。というのは、それぞれ地方に起こる信仰覚醒は、聖書協会、トラクト頒布協会、宣教協会、監獄協会に、大きな救援の準備をよび起こした。彼らはそれを手に満

たした。彼はこれらの事業を知り、そして、エリザベス・フライのことを心から感動して聞いた。キリストを信じる信仰が効果を発揮した事実は彼に深い印象を与えた。人々はいつも罪人の孤独について、またキリストの功いさおによる恵みの義認いきおについて語る説教に聞き入った。フリードナーは、合理主義から新約聖書の信仰に帰る道を見出した。

彼は再びカイザースヴェルトの説教壇に立った時、率直に次のように告白した。「十字架につけられたイエス・キリストは信仰においてまた愛においてもっとも強い絆きずなである。彼を通して聖徒の共同体はしっかり立つ、これが私の旅の途上で学んだ最初の教訓である。」[8]

フリードナーは1824年以降、5回イギリスに行った。イギリスはドイツを抜いて10年先を進み、急速に産業が発展していた。フリードナーが2回目にイギリスの地に足を踏み入れた時、産業革命はすでに後退し、近代的な工業国になっていた。フリードナーは、最初にイギリスを旅した時、工場で機械の前に立ち、すべてを驚き称賛した。

彼が出会った重要人物たちの中に、木綿紡績工場の共同経営者のロバート・オーウェン(1771-1858)もいた。彼はすでに1809年、大規模な社会改革計画を作って企業の社会政策の思想を調査した。オーウェンの模範的な企業と、彼が立案した計画の中にある就業規則はイギリスの労働者保護法の重要なきっかけとなった。1819年にすでに児童労働の制限や労働規定や工場査察は導入されていた。フリードナーはここでつよい感銘を受けた。[9]

彼は、科学技術の時代が、なかば夢を見ているようなドイツでも同じように始まる、また、科学技術の大変革は止まらないと見た。ドイツでも郊外から急速に成長する工業都市に人口の構造変化が起こっていた。科学技術は、妻と未婚の娘が朝早くから夜遅くまで熱心にとり仕切っている家庭経済をかなり破壊するだろう。工業はドイツでも時をあわせて、これまで主婦が家庭で作ってきたものを早く安く生産するようになるだろう。また日々の務めでいっぱいの中流と上流の地位を失うに違いない。多くの自由時間を使えるようになったのに仕事がない妻の困窮は、打開策を必要とした。100年の間ずっと重要とされた父権制によるものは、妻と娘を家に縛ってきたが、家庭の偏狭な壁

の外では有効でなくなった。そして保護された女性の世界は破綻しなければならなかった。まもなく上流階級の女性の世界は、男女同権と生活の自立の可能性を求める戦いを受けなければならなくなった。

下流階級においては、妻と母も同じように夫のわずかばかりの労賃の足しになるように工場の中を歩き回った。彼女たちは人間として価値のある生活をするために戦わねばならなくなった。

フリードナーの偉大な使命が始まった。彼は突然襲ってくる困窮に対して、同盟者を探して、立ち向かった。彼は縮小された家政の中で、これまで以上に意味を発揮するに違いない母性愛に満ちた妻と娘の愛の力が活用されていないことを見た。彼は彼女たちが真の意味ある活動にあこがれていることを知った。

彼は、オランダとイギリスで、キリストが心の力に打ち勝って、女性と母の賜物が呼び覚まされる、そのような愛の力を学んでいた。信仰深い心をもっている福音主義キリスト教の未婚の女性を引き寄せて、その使われていない母性的愛の力を展開させる時、貧しい民の中にある多くの悲惨がどんなに和らげられるかという、ひとつの道が示された。真の召命をあこがれていた女性と女子たちは、この時偉大な恵みを明らかにした。

4

フリードナーの故郷での最初の事業：釈放女囚救護所
編物学校 - 幼稚園 - 福音主義保母養成学校 - 最初の
ディアコニッセによる病人看護の暗い時代の清算

解放戦争後にドイツを覆った暗黒時代は待ち望んだものではなかった。ドイツの監獄の中は困難と見え、少なくとも病院の中は困窮していた。青年フリードナーはカイザースヴェルトにいた10年間、彼のライフワークの基礎を身につけ目的に向かった。1826年、彼は超教派的なライン - ヴェストファーレン監獄協会を招集した。まずドイツの国々と教会の指導的な有名人、白髪のフォン・シュタイン男爵、シュ

ピーゲル伯爵が、またケルンの大司教とカトリックの聖職者がそれに参加した。エリザベス・フライはフリードナーに道を教えた。この二つの宗派の教誨師^{きょうかいし}たちは未決囚と既決囚、年齢による囚人の区別、また墮落の程度の区別をしたどちらにも招かれた。

2回目のイギリスの旅でフリードナーは1832年にエリザベス・フライを人格的に知った。帰国後、彼は二つの宗派に、釈放女囚施設の建設を提案した。福音主義教会自身がしようとしなかったのでフリードナーはカイザースヴェルトにつくるように強くせまった。1883年、釈放された「ミンナ・E」は、牧師の離れ家に彼女たちの救護所をつくった。[10]

1835年初頭、フリードナーは出獄者の荒廃を避けるために同じ小さな離れ家で編物教室を開いた。非行を行った多くの女性と女子たちからは、何も始まらなかった。支出簿には、追い出したかあるいは逃げ去った人の名前が別の名前でひんぱんに記入されていた。

1836年、幼稚園が開始され、子どもの慈善事業がはじまった。同じ年に、牧師の妻フリーデリケ・フリードナーの、ミュンスター生まれの女友達は、カイザースヴェルトに家を購入するために1,800ターレルを自由に使えるように準備した。1836年10月13日、「福音主義看護婦学校」が始まった。その時まったく新しい方法がとられた。この看護学校に入った女性たちは、基礎的・理論的・実践的な看護学の授業をうけた。2年余り後の1839年1月、教育を受けた2人の看護婦が、エルベルフェルトにある、初めは外国人の病院であった所を受継ぎ、同じ年にフランクフルト・アム・マインで貧窮に陥った貧民、扶養してくれる人がいない老人をみる老人ホームが始められた。彼女たちはカイザースヴェルトの「ディアコニッセ」として尊敬され、今はフリードナーが名づけた看護婦と呼んでいる - 「女性の梅毒患者」と「疥癬にかかっている者」の看護をベルリンのシャリテ[Charite]で、地方の精神病院での精神病看護をマールスベルクで引継いだ。

それと同時に、フリードナーと彼女の最初の勇敢なディアコニッセたちの戦いは、歩きまわり途中で病気になった遍歴職人たち、貧しい長患いの人と見捨てられた病人が横たわっているのに、誰も真剣に世

話をしないドイツの病院の驚くべき状況に勝利した。他の患者たちはだれでも、いつも感染と非行化と悪臭だけの惨めな施設に入れられることに反対して力の限り抵抗した。そこで、看護師と看護婦たちは、評判を疑わしくする彼らの軽蔑された職業を追跡調査した。彼は少なくとも、患者のわずかな報酬[チップ]を頼りにしていた状況を打ち破った。病院の入り口はいつも開かれていた。フランクフルトのディアコニッセたちが観察したように、少女たちは早いうちにパンきれをもって病室に行き、毎日、火酒と黒パンを交換するようになった。この「病人看護の暗い時代」は、今はディアコニッセたちによって清算されている。

5

母の家ディアコニーの創設 - フリーデリケ・フリードナー
ディアコニッセの最初の責任者 - 根本的批判
フリーデリケ・フリードナーの帰天

1844年、偉大な信仰覚醒運動の説教者ヨハン・ハインリッヒ・フォルケニングはミンデン - ラーヴェンスベルクの大きな村落に、最初の共同体ディアコニッセ、ヨレンベックを招いた。その時、初めて、共同体ディアコニーの活動分野が始まった。

1836年、最初の病院ディアコニッセにゲルトルート・ライヒアルトが就任し、同じ年に、最初の「子どもディアコニッセ」を受入れる「教師 - 教育のディアコニー」も始まった。それと同時に、福音主義女性教師養成学校がカイザースヴェルトで始められた。看護と教育のディアコニーは並行していた。

患者や受刑者、貧民また老人をみる女性奉仕者の枠組みは、元気があって荒廃した青少年の場合と同じように取り払われた。

困窮が各地に増大した。財源は減少した。その時、フリードナーは新たに乞食の杖を手にもって、たとえば1837年の2ヶ月間はエルベルフェルトとバルメンで1,000ターレル以上を集める旅をした。[11]

仕事のない未婚女性の困窮を見て、教養ある階級の有能な女性がほとんどディアコニー職を申し込まなかったことは、彼にとってきわめて重大なことであった。フリードナーがヴュルテンベルクに旅をし、関係が始まると様子は変わった。

まもなくシュヴァーベンの覚醒した仲間たちの中から、ライン川下流沿いの道に有能なヴュルテンベルクの女たちがあらわれた。1839年5月22日に、シュヴァーベン出身の最初の女子が4人、カイザースヴェルトに到着した。農民の娘たちであるが、そのメンバーはよい才能をもっていた。そのころ29歳のマリア・シェーファーは40年間の活動の中で、ディアコニーをシュレージエンで土着のものとした卓越した女性となった。ゾフィ・ワグナーはカイザースヴェルトでディアコニッセ施設の寮母とシュヴェスターの女教師に任命された。[12] 女性ディアコニーへのヴュルテンベルクの最初の貢献である「心に残る贈り物」は、特に有能で意志の強い女性であった。

徐々にひとつになっていくシュヴェスターの群れにとって、一步一步内的な秩序が形成された。看護学校から母の家が生まれた。愛の保護と母の家の制度と規律は、派遣される看護婦が無防備のまま見知らぬ人の所になくてよいように、また病院で女性の世話係が働く時、また個人で雇っている看護婦がたびたび雇い主の好き勝手と自制のない欲望にうんざりして辞めようとするような時、なくてはならないものとなった。フリードナーと彼の妻は時代の社会的秩序を代表し、ディアコニッセたちの親代わりをした。

服装規定も徐々に作られた。フリードナーは空色が好きで、黒色は病人には陰気に見えた。フリードナーは、ディアコニッセが職務の品位をあらわすしるしとして、結婚した中産階級の女性の服装をとり入れた。「下女の身分」[Magdstand]出身のディアコニッセたちもそこから出世した。ディアコニッセが着る服は、朝から夜寝るまで提供された。そして、職業案内にしばしば見られるだらしのない看護婦が着ている通常のモーニングガウンはかたく禁じられた。

最初のディアコニッセたちは、自由病棟で制服を着て、学校教師の収入に相当する年収30ターレルの一定の給料を受け取った。いたると

ころに新天地が広がり、後になって、賃金労働者あるいは月給をとる人たちが自分ら拒否して、協同組合の形が生じた。[13]

42年という年月を、完全な自己否定と献身的な犠牲をいとわない生活を重ね、負担過剰で健康を害したフリードナーの最初の妻フリーデリケが果たしたディアコニー奉仕は重要な意味をもった。彼女は牧師の妻であり、3人だけが生き残った11人の子どもの母であった。彼女は責任者の妻として彼の指示を果たす義務があり、また同時にシュヴェスターたちの直接の責任者であり、全てのディアコニッセの責任者であり、母であり、友であった。

フリードナーは、女責任者にふさわしくなろうとして無駄な試みを3回したが、アマリエ・ジーヴェキング自身は招聘しょうへいをことわるべきだと思っていた。夫にとっては、すべてにおいて牧師夫人である彼女の経済力と慎重さと節約は必要であり、それは重大な根本問題を細部にわたって同等に話し合えるというように、彼女の細い肩にかかっていた。彼女はディアコニッセたちを自分が招聘された病院に任命し、何もわからない医者と管理者と不愉快な交渉をして、干渉を阻止し、ディアコニッセたちの自主性を守った。その間に子どもはたびたび故郷で病気になるか、そこで長く横になっていた。

母の家は入所者と出所者の絶え間ない出入りがあった。彼女が帰天するまでの5年半の間に50人が看護婦になり、29名だけがふさわしい者としてとどまった。

フリードナー自身も女性の心からのすばらしい知識をもっていた、彼女自身卓越した教育者として、際立っていて、まさに、彼女は彼にとって真のパートナーであった。

明晰めいせきで強く民主的で自由なラインラントの生粋きっすいの娘である彼女たちが、ディアコニッセのために、また福音主義の自由を支持し、彼女の夫を受け入れなかったことはまったく悲惨なことであった。

彼はディアコニッセ施設の制度を、プロイセンの緊張した上下関係のシステムにならって、男責任者 - 女責任者 - 寮母 - ディアコニッセというように構想した。自己責任ではなく、質素な時間どおりのディアコニッセの従順を上においた。フリードナーはシュヴェスターの個

人生活を認めず、シュヴェスターたちの組合の自治を知らなかった。看護婦長自身はずっと後までシュヴェスター制度そのものから受けるものはなかった。

ここにフリーデリケの困難があった。愛ととりなしの祈りにおいて他者を支える福音主義の精神が生きる共同体が、その原型として念頭にあった。この改革という方法に刻印された教会性をもつライン地方のプロテスタント教会は以前から活動的な責任ある自立的共同活動を行う信徒の世界をつくっていた。このことは彼女自身の血肉であり、また彼女自身の一部であった。彼女はこの活発な共同体の生き方を、ディアコニッセのシュヴェスター共同体の中に反映しようとした。[14]

彼女自身は夫の決定に従った。彼女は彼と共に、ディアコニッセは普通の人ではなく、普通であることをゆるされていないと確信していた。彼女が喜んでシュヴェスターさんと呼んだように、フリードナーの確信に従って各人は「キリストの下女」[M 懺 d Christi]として行くほかに道はなかった。フリーデリケは彼と共にこの職務において、真の召命だけを知ろうとした。それゆえ、彼女は、不安になっている病院のディアコニッセの要請を増やすように、ディアコニッセの奉仕とこの世の職業的奉仕と両方を拡充して世話するように要請し、多くの提案をした。テーオドーア・フリードナーは再び拒否された。彼は、病院がディアコニッセによって牧会的世話をするという - 彼が必要としたすばらしい可能性を望み - 彼が強制するまではあきらめなかったのかもしれない。彼が、ディアコニッセたちと看護婦たちの間に生じる緊張を心配したかどうか？また、病院の一つの精神が脅かされると思ったかどうか？この問いに、答えはまだ出ていない。[15]

彼女たちが病室で患者と祈り、彼女らの牧会の言葉を語ろうとした時のことをフリードナーが彼女たちの報告を聞いて知ったことは、ディアコニッセたちはすでに何らかの抵抗と嘲笑に出会っていたことである。反キリスト教と反教会が工業化したドイツにおいて、足早に先頭を行った。彼はそれほどはっきりと洞察をしていなかった。[16]

もし初めに、看護婦たちに第2の職業の道が開かれていたならば、ディアコニッセと看護職はそんなに苦勞をしなくても済んだことだろ

う。彼は重んじられたディアコニッセ職の影の中で、骨折る苦しい思いを、そんなにしなくてもよかったはずである。

フリードナーは奉仕職と女性のディアコニーに全てを集中した。このことは彼にとってすべてのキリスト教慈善の総体を意味した。生まれつつあった工場労働者階級の社会福祉のまた社会政策上の問題のために彼自身は努力しようとはしなかった。ディアコニー活動への集中において、フリードナーの不滅の偉大さと限界があった。しかし、ヴィヘルンはこの自制を決して理解できなかっただろう。

だが、フリーデリケが帰天する1842年に至るまで、この創造的な創世期に「使徒的ディアコニッセ職の復活」を男性ディアコニーと並んで男女同権の職務として養護と教師、教育活動などの分野で実現した。ディアコニッセ母の家に故郷が与えられたシュヴェスターたちの間では、すべての身分の格差は克服された。工業化時代によってヨーロッパの古い実業家の社会秩序が崩壊していく只中で意味深い女性の職業のために、道が発掘された。今まで女性しかなしえない愛の力と教育の力が実り豊かな価値をもたらした。

フリードナーは一つの思い違いをしていた。彼がつくってきたものは「使徒的ディアコニー職の回復」ではなかった。そうではなく、改革の精神から出てくる、なにか新しいものであった。「だがこの思い違いは、それがしっかりした支えをなし、確信を強め神の意志に従って行動する幸いなものであった」。^[17]

困難に満ちた時、たとえば1846年、彼が最初に彼らの活動を守るといふ国の認可を受けたその時、彼は自分が神から呼ばれた人であると知っていたので、ただ耐えることができた。彼は故郷で、祈りと確固たる信仰の世界にいて、憐れみにみちた心、愛の発明者、そして女性たちに影響を与えるすばらしい才能に恵まれていた。彼は負い目と罪のために拘束されている人のために何度も泣いた。彼は憐れみ深いサマリア人の姿を飽きることなく考察した。

フリーデリケ・フリードナーは死ぬ思いをした時、祈り、一方彼は手を休め、彼女を慰めた。「私は私の神をほめ歌うべきではないのか。私は神に感謝すべき存在ではないのか・・・純粋な愛だけがあり、誠

実な心は存在を動かす。神への奉仕の中で訓練したすべてはずっと続いた」。人はその目を閉じる終わりまで神に祈る。「神の愛は永遠である」。

6

信頼できる基礎の拡張 - カロリン・フリードナー
教師と子どものディアコニー - 教会に対する立場

ベルテアウに生まれたカロリン・フリードナー（1811-1892）は1843年5月29日に結婚して、2つのディアコニッセ施設の管理者になった。彼女のからだと精神と組織する仕事量は少なくなかった。この夫人の内的戦いの仕事量、子どもたちにかけてのように彼女の夫にかけて熱い情熱的な愛の仕事量は少なくなかった。同様に、彼女は究極の率直さをもって、フリーデリケのように神と共に取り組んだ。「主が、あなたと私をディアコニーの仕事に献身するように召し、私が喜んでしようとしていることはいつも確かでした」。^[19] 彼女は心を強くして「愛の国の女領主」となった。

天才は2人の女性のもとで、世界的視野をもつフリードナーのもとで、すべてに冷静な明快さにおいておらかなものであった。1836年、フリードナーが看護学校を始めた時、彼はカイザースヴェルトで一番大きく一番立派な建物で3階建て、高く明るい部屋を持つ、前の市長の家を購入した。彼は病院のために最良の医者と契約を結んだ。彼はたちまちにしてドイツの病院制度を根本から変え、驚くべき新しい病院看護をやりぬき、1844年のイースターは幼稚園教師養成学校から国民学校の女教師の養成学校を始めた時とおなじように行動した。

ここでも、彼は男子だけが学校の教室にいて正しい規律を守り、教えたことを知的に理解するという偏見をうちやぶった。プロイセン国は、全く同じ時に、女性を教師として養成し始めた。だがフリードナーは福音的女子教育の模範を設けた。子どものディアコニッセから女教師のディアコニッセが生まれた。1850年フリードナーは才能のある養成学校の女学生を女子高等学校の教師に教育する目標をもって、その

実現に移そうとした。結局、女教師と女家庭教師の養成は、すべての年齢とすべての学年で実行された。フリードナーが死ぬまで千人以上の女生徒がカイザースヴェルトの学校で導かれた。

「私たちの愛する養成学校の女学生は3つの目標を目指す。

1. あなたがたは自分の神と救い主をもっとよく知るようになること。そうすれば、あなたがたは神への愛と隣人愛の中で成長するだろう。
2. あなたがたは女生徒をすべて基本的なテーマの中で教えることができる。中産階級の娘たちが必要としてきたほかの知識においてもそうである。
3. あなたがたは女生徒を実際の家庭生活のために準備すること。」

[20]

女学生の日課は、もちろん母の家の霊的生活に組込まれていた。彼女たちは日々の祈りと礼拝と祝祭を分かちあった。フリードナー牧師は他のことを思わなかった。教会内で、ディアコニー職は教会が決めた奉仕として発展した。

彼は教会支配の干渉を望まなかった。彼は国が新しいプロイセンの典礼をラインラントに導入しようとした時、これに反対し、また国教会の後見に妥協せず反対し福音の自由を守った。特徴的なことは職務上の親密な結びつきを総監督ともつのではなく、教会会議で選出されたライン・ヴェストファーレン教会の議長たちと持とうとした。[21]

彼は、ヴィヘルンのようにルターがいう全信徒祭司制の意味で、教会の広い領域でディアコニーと伝道の働きをする人たちの自由な活動的、兄弟的な協力の中で霊的勤めをなすようにした。教会職はかなり働かなくなり、困窮は内国伝道の開拓者たちの心を燃やしたので、彼らが指示するようになり、こうしたことは直接に王と国に届いた。救貧制度、病院制度、そして教育制度を掌握している分野だけは、国の許可をかなり自由にした。国教会は、18世紀よりも、すべてを統治する国の絶大な力と結ばれていた。これまで比較的自立した教会会議は、19世紀のはじめに文部省の部門などと並列するかまたは下位にあった。真の問題はもっと深いところにあった。なおかなりの程度ま

で合理主義におぼれた国教会と文部省の公務員たちは、信仰に覚醒した民と合理主義精神をもつ人たちとの間にある溝を深め、その時、国内の状況は、信仰覚醒運動と復活したキリスト教慈善を定着させた。

明白になったことは、伝統的なまた制度的なものの中に固まっている国教会が、数百年のあいだに反キリスト教の大衆文化の中にある脱キリスト教化運動に対して、対抗できなくなっていたことである。キリスト教会当局の緩慢な運営に反対して、人々は前よりも直接に国や王に頼るようになった。彼らは国教会を「付加的なものとして脇によける」ことは決してしなかった。しかし彼らはこの世の教会を好み、唯一の聖なるキリストの教会を信じた。

7

ディアコニッセの家 - カイザーズヴェルトと並ぶ特徴 フローレンス・ナイティンゲールとイギリス - ベルリン王家の施設

フリードナーはやがて世界にも飛び出した。その時、カイザーズヴェルトで大きな活動の領域が次々と開かれ、フリードナーはドイツ国内で教会ディアコニーに女性が参加できるように疲れを知らずに働き、愛の奉仕の必要性を訴えた。カイザーズヴェルトに加えて、もう一つのディアコニッセ施設が生まれた。それはたとえば、ストラスブルでヘルテル牧師が、堅信礼を受けた女性が病人と長患いの人を看病する「貧民奉仕女性の会」を創設したように一つの根から生まれたものである。そこから1842年、シュヴェスター制度を協同組合の愛の訓練へと発展させたディアコニッセ施設が成長した。受け入れについて、見習シュヴェスター、補助シュヴェスター、堅信礼をうけたシュヴェスターというように、3つの段階に分けたシュヴェスター制度を定め、看護婦長も彼女たちの仲間だけから選んだ。施設の牧会者は審議権だけを持っていた。パリのディアコニッセ事業、それは多くの感動的な変化を通り抜けた、オランダのディアコニッセは、看護に一面的に結ばれたものとなった。ベルンの活動(1844)は、最初は多くのあざけりを受けた。パーゼル近郊のリーエナー・ディアコニッセ施設

(1852)は創設者、不屈のシュピットラーがいた、ドレスデンのディアコニッセ事業(1844)はフレイリッヒ牧師により、その厳格なルター教会の特徴を強く出して1856年から花開いた。チューリヒの事業は1858年にその奉仕を開始した。これらはそれぞれ固有の形をなした。他の施設はプレスラウ、ケーニヒスベルク、シュテツィン、シュトットガルト、アウクスブルク、そしてシュパイエルに続いた。フリードナーは東方のプロイセンに影響を与えた。そこで多くの問題と困窮を共通に持っている南ドイツの母の家は、スイスの施設とアルザスの施設と合併した。[22]

北方の国においても同様に、ディアコニッセの施設が生まれた。その一部は特別にカイザースヴェルト母の家と親密に結ばれていて、テオドーア・フリードナーによって種々の提案と助けがなされた。[23] しかしながら、フリードナーの有名な女弟子、フローレンス・ナイティンゲール(1820-1910)は、カイザースヴェルトとパリでの修行の後、両親の意志に反して、内的使命感をもって、クリミア戦争の野戦病院ですばらしい模範を示し、イギリスにおける近代看護の先駆者となった。彼女によって創設されたロンドンのシュヴェスター学校によって彼女はイギリスの看護を尊重される女性の職業に高め、そしてまた、女性のもっているすばらしい自由を発揮させることに貢献した。[24]

1848年の5月革命は、文字通りの新しいディアコニッセ施設の設立の波を引き起こした。その数は1848年以前から1861年まで9つあったものが、カイザースヴェルト施設の創立25周年記念の時には27に増えていた。フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は、フリードナーをすでに1848年にベルリンにある「中央ディアコニッセ施設」のお気に入り計画と関連する「全ディアコニッセ施設の霊的監督者」に任命した。婦長マリアンネ・フォン・ランツァウを王室財団の新しいディアコニッセ施設「ベタニア」に採用した時、フリードナーはすべての誠実な看護に、適切な方法をもっていなかった。それを調べるためにヴィヘルンが入ってきた。カイザースヴェルト出身の12人の「保護された」最初のディアコニッセたちは新しい婦長に従わず、「カイザー

スヴェルト出身の彼女たちはみな、そこから支配され、そこに報告し、発言した。」[25]

結局、「中央ディアコニッセ施設ベタニア」は、国からその性格が自由で穏やかな福音主義教会の施設として認められるまで、両者はずっと大臣官僚との対決をしなければならず、この王立機関は「教会ディアコニー母の家」としてではなく、国立の「病院」としてのみ見られてきた。[26]

カイザースヴェルトも同様に身近な模範であった。そこで最初のベタニアの看護婦長が理解し、ベタニアは固有の特色を持つものとなった。シュヴェスター制度の構成についてはストラスプールが模範となり、養成についてはノイエンドッテルスアウが模範となった。ヴィヘルンをはじめは「ベルリンの仕立服娘と家政婦」だけが、ディアコニッセとして届け出たことを気にした。それで、王立の施設はより高い身分の娘たちをひきつける魅力を持っていることが分かった。マリアンネ・フォン・ラッツアウは、元気なシュルツ牧師のそばでよきパートナーであるディアコニーの位、「婦長」という称号を授けただけでなく、シュヴェスターも社会的にいっそう名誉ある地位であり、その仕事のために包括的な教育を与えた。これに対して、小説『ディアコニッセたち』(1855)を書いたグツコウのような、自由主義 - 市民の反教会的著述家の節度のない非難もありえたとし、彼の受け売りをするバルト海沿岸社会の著述家アレキサンダー・フォン・ユンゲルン - シュテルンベルクの小説『2つの援護』においてはもはや何も伝えていない。[27]

8

フリードナーの東洋ディアコニー - 第1回カイザース ヴェルトの母の家総会 - フリードナーの帰天

1849年フリードナーは北アメリカのピッツバーグにディアコニッセの施設を創設するために、4人のディアコニッセを連れて行った。彼

はすべての大陸における女性の世界の債務者という自覚をもっていた。その時、彼には「東洋ディアコニー」の建設をするために東洋に行くように迫るものがあった。

フリードナーの心がそこにあり、彼の心の喜びを再生させる使徒的ディアコニーは、エルサレムから始まった。スイス人宣教師ゴバトは1846年、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム4世がお気に入りの施設であるエルサレム英国国教会と、プロイセンに統合された司教領の司教に叙階された。フリードナーは1851年、2人だけが求められていたところ4人のディアコニッセをエルサレムのゴバト司教に送った。看護と教育事業がエルサレムで始まった。コンスタンチノーブルにおいて、シリアにおいて、バイルートにおいて、カイロとアレキサンドリアにおいて、祝福にみちたカイザースヴェルトの東洋活動がはじまった。フリードナーは「回宗者をつくろうとしない」イスラム教徒への宣教の口火を切ろうとし、未発達な東洋のキリスト教会で抑圧されている女性が、キリスト教の母として、やさしいシュヴェスターとして、真の召命を示してくれるように望んだ。フリードナーの東洋ディアコニーにおける過度の期待は満たされなかった。だが彼の孤児院は東洋で嵐の中を生き残り、今日までアフリカやアジアにおいて、空に向かってそびえる世界教会ディアコニーの橋頭きょうとうとなった。[28]

フリードナーは、彼の最初の年報に、彼のディアコニー活動の世界教會的な広さをカイザースヴェルトの友人仲間にはっきりわかるように書いている。彼はその時、すべてのディアコニー施設の提携を会議で決めようとした。カイザースヴェルト施設の創立25周年記念の年、1861年10月の9日と10日に、彼はほかの施設の代表者たちをカイザースヴェルトの会議に呼んだ。27の母の家が招待され、そのうちパリやノイエンデッテルスアウのような基本的な事業体の14が欠席した。だがこの始まりからカイザースヴェルト「母の家の總會」が始まった。フリードナーはお互いのために次のように祈りをあわせた。「心の絆が、聖なる愛と交わりを、主の前で、主と共に、より強く結ばれますように」。[29]

フリードナーは、死ぬまでの3年間を恵まれた。彼の健康は長年

ずっと極度に脅かされていた。1838年に彼は天然痘になり、1841年にはチフスにかかり、1852年には肺病が生命を危険にした。1856年、再度肺病をおこし、1857年、エジプトを旅した時、灼熱の砂漠で大咯血をひきおこし、ついに体力は限界にきた。咳が出て、青くやせ衰えた、絶望的な病人フリードナーは1857年帰天した。力を失くした7年の間、彼の後継者、娘婿、ユリウス・ディッセルホフがそばで助けてくれた。1864年10月4日、フリードナーはついに目を閉じた。女性ディアコニーの先駆者、19世紀のディアコニーの内部で世界教会的人物は亡くなった。死の床で彼は彼の人生を共にした妻と手伝いの女の人に苦勞の多い年月の多くの奉仕を感謝した。なかでも彼女について次のような言葉がある。

「私はディアコニッセたちを同等に扱った。私は彼女たちすべてと心から親しく接したと信じている。今日まで私は父のために生き、彼を愛した。私の心がかもっと広くなれば、彼は喜んでくださり、私は愛に満たされ、実り豊かになった。父なる神の恩寵により、祝福を授けよう。」[30]

深いところを共に歩いてきた妻は次のように書いている。「真夜中に恐ろしい苦痛が襲いかかる。私の心は深い谷間に引き込まれ、大きな水の中にあつた。私はそのことをもう書くことが出来ない。それは神の孤独と地獄の苦しみであつた。」

誠実な娘婿、ディッセルホフが彼女を助けた。

娘婿であり、カイザースヴェルトにおける、テーオドーア・フリードナーの後継者ディッセルホフ牧師(1827-1876)はまず、フリードナーによって、1851年に創立された女性の気質と神経症患者のための療養所を指導した。精神病の研究からまた、精神薄弱と白痴[Blen und Idioten]の観察から、当時わずかな世話をするだけであつた人のために、先駆的な活動が始まつた。すなわち「キリスト教国におけるクレチン病患者、精神薄弱患者と白痴の現状と、ドイツ国民の悲惨の下で、最も孤独な人への困窮と援助のハンドブック」(1857)、それはラインラントとヴェストファーレンにおける精神薄弱者のための施設の設立のきっかけを作つた。更に、施設はドイツのあらゆる部分に広がつた。

ついにフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクのもとでベートルに5千床を擁するてんかん病患者のための特別な施設もできた。

9

ノイエンドッテルスアウのヴィルヘルム・レーエ
ルター教会ディアコニッセの父 - 恒常的でない一時的な母の家

ディアコニー活動の文字の中にその名を消しがたく刻みつけたもう一人の人物ヴィルヘルム・レーエ(1808-1872)が、フリードナーと並んで出てきた。ルター教会のこの偉大な人物は、ヴィヘルンとフリードナーの活動を注意深く観察したが、2人を避けた。彼はフリードナーのカイザースヴェルトにおける偉大な事業を見学せず、内国伝道中央委員会を欠席した。しかし教会に使徒的生活を復活させようとする憧れにおいて、また女性の特別な才能、その愛の力と教師の力を教会のためにあきらめることはできないという点で、大きな一致があった。

レーエの中心思想は、ルター教会とゆるぎなく結びついていた。「彼の生涯と事業の全体、それは礼拝の中で主なる神を、聖なる感動をもってあがめ、人への奉仕においていつも準備している主の下女[Magd]であり、互いにその手足となる共同体を世話する、真の教会の歌というべきである。」^[31]

典礼との特別な結びつきは、彼の敬虔な信心の際立った特徴であった。彼は喜んで町の牧師になろうとした。彼は、彼によって有名になった村落ノイエンドッテルスアウの牧師であり、牧師にとどまった。彼の不思議な雄弁は、フランク地方の村落をただちに巡礼地とした。人々はいつも遠くから定期的に彼の説教を聴きにきた。彼はまた天分豊かなルター派の礼拝者であった。彼の集中的な牧会は、古ルター教会の個人告解を復活させた。彼はいつも教会の最初の牧師であった。そうなのである。彼は自分がルター教会の見張りの職についていると心得ていたので、アメリカに移住するルター教会同胞に教会としての世話をしようとした。また、1846年からはミシガンにあるルター教会

の居留地をつくるために、その前年はインディアン宣教団をつくるために努力した。レーエが始めた最後の活動は、ディアコッセ施設であった[32]。

彼は本当はもう一つのことを望んでいた。1853年、彼は「ルター教会女性ディアコニー会」を創設した時、これは教会のディアコニーの新生の始まりと言わなければならない。地方の至るところに、女子の会、活動的な慈善の細胞をつくろうとした。レーエが期待したことは始まらなかった。8つの協会が生まれたただけだった。

「もしここで燃えあがる火花が点火して全国に広まり、いたるところに女性ディアコニー協会が設立され、それが普及していたならば、また、愛と慈悲の炎が、私たちの民族を感動させ、つつみこんでいたならば、実際に、ディアコニッセ施設が昂然と頭をもちあげ、その光をすべての方面にむかって輝かせていたことであろう。他方では民衆が独自の女性ディアコニー協会を形づくることもなかっただろう」[33]

「永続的でなく、一時的にだけ」レーエは1854年、ガストホフ・ツア・ゾンネ[Gasthof zur Sonne]の賃貸しの住居に、少女たちのための教育施設を始めた。女生徒たちは「講習」を終えると祝福を受けて故郷の地で、学校、病院または子どもの保護施設で奉仕する場を与えられるようになった。卒業見込みの女生徒たちは、教育施設に彼女たちの生活共同体がほしいと願った。レーエは母の家を一步一步導いた。その際、レーエは「喜ばしい自由」を保つことを大事にした。母の家の最後の教育を受けた少女が、ディアコニーの奉仕をしていて、結婚した場合、それは「非常に残念な出来事」ではなかった。とりわけレーエがひとつだけ期待したのは、「見習期間後のすべての女生徒とディアコニッセが誓いに誠実であろうとすることであった。」[34]

「すべてよいものは、キリスト教の活発な群れの自由意志から生まれ、それを定める。とりわけ今日のディアコニーは自由意志によるものであり、神がそのために活発に呼びさますその人との自由な連繋である。一般に、兄弟会と看護婦制度は死んだ教会のしるしではない。そうではなく、なお存在している強い、またよい意志のしるしである。それは今日では墮落している大教会のまさに生の担い手である。この

ことを他のものに変えていく力は人間の中にある。兄弟会と看護婦制の形は、その後やり方を変えて、完全なものより劣ったものの形をとったということも確かなことである。時代によってはふさわしい形をとらせるべきであり、そのように19世紀のディアコニッセたちもまた、可能であり時代にふさわしい形で存在するべきである。形はディアコニッセを現実的にし、その中に喜んで結ばれる。昔から美しい完成を見ていた。それはあこがれ、切望し、可能である限り実現しようとした。また得ようと努力する目的を持っていつも彼らの場所を満たした。」「[35]

レーエは、「ディアコニッセ施設がおそらく10年は続く、その時その小さな光を再び消すことになるかもしれない」ことをいつも計算していた。[36] 「そう、それはよかったり悪かったりするもので、現世に永遠に存続するようなものではなく、それ故にディアコニッセ施設は、一度は、没落した。」「[37] レーエのあこがれはヘルマン・ベッツェルの美しい言葉で次のように言いあらわされている。「古代教会の共同体ディアコニー制度の思想は、私たちの時代にはまだ理解できていない、だが過ぎ去って2度とやって来ないというものではない。すなわち、その成長を助けることが私たちの義務である。多くの枯れた木は、あとに来る嵐によって葉を落とされたが、また何度も発芽する力をもち、発芽した朶によって強められた。20世紀はその終わりには、今よりももっとよい方法で奉仕できるようになるだろう。」「[38]

ディアコニッセ事業の中で、レーエが知恵と真実についてはっきり語り実践したことは、フリードナーの仕事と同じようにディアコニーの歴史の中に記されている。年毎に神の言葉の指示を学ぶことは、ノイエンデッテルスアウのディアコニッセを描いた絵に書かれている。合同教会の中のルター教会とルター教会共同体の領域でノイエンデッテルスアウのディアコニッセたちはバイエルンの郊外にある多くの慈善を行う場所に呼ばれた。そしてカイザーズヴェルトのシュヴェスターが広い世界への新しい出発をする際に、いくつもの施設に力を貸したように、それは今、ここで始まったのである。

「私が、彼女たちのそれぞれの生活状況と働きの中に、あるべきディ

アコニッセを描いたとしても、私は画家ではないし、歌手でもない。それは絵の全体の輪郭と多くの歌を生み出さじやろう。私は馬小屋の中に、乙女を描くかもしれない。洗濯小屋の中に祭壇を、また純粋な亜麻布で首筋を装うように、憐れみという衣服を着せる。台所で、また大きな病室の広間の中に田畑を、聖歌隊が3唱する時、そして彼女たちが全く1人で、コミュニカチオン、ヌンク、ディミティスを歌う時 - 私は可能なすべてのディアコニッセ職を描くことが出来るかもしれない。しかし、すべての人たちの中で1人の乙女を、ヴェールの中にではなく、いつも1人の人を描く・・・どうしてなのか?・・・ディアコニッセは最も劣った者であり、かつ最も偉大な者でもあるので、自分が最も劣った者であることを恥じない。崇高な女性の働きがだめになってはならない。足は排泄物とほこりの中で卑しい労働をなし - 手はハーブをもち - 頭は陽の光を受けて祈り、イエスを理解する。 - そのように私はこのタイトルで彼女たちの銅版画を描こうとした。「私とあなたがたはすべてが出来る。 - 働き、歌い - 賛美することが」、このようにその下に書いたものだ。[39]

10

シュヴェスター第2世代 - 戦争出動 - 新しい刺激
 フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク
 エヴァ・フォン・ティレ - ヴィンクラー

1872年、ルター教会人、すばらしいディアコニッセの父、ヴィルヘルム・レーエは死んだ。その間に、種々のディアコニッセ施設が協議をするために集まってくるカイザーズヴェルト会議は定着した。ノイエンドッテルスアウも同様に参加した。シュヴェスター第2世代が開拓者の世代と交替し、新しい問題が出てきた。女性解放が始まり、マ

ルクス主義者の労働運動がはじまった。

これは闘争と圧迫を同時に意味した。大工場でパンを得なければならない少女や女性の世界から、ディアコニッセの施設の後継者は出なかった。おそらく「仕える身分」出身のかなり多くの少女たちの参加申込があったが、しかし、それは素朴な中産階級の出身の娘たちであった。後継者はここで、シュヴェスターの半分も堅信礼を受けなくなったほど、部分的には非常に強かった。彼女たちはこのすぐれた教育を受けた後、ほかの職業に出世の道を見出した。「プロレタリアート」に落ちぶれる前に、彼女たちは守られるようになった。

いわゆる「より高い階級」から母の家に申し込む少女はめったにいなかった。ジュネーブ協定と赤十字が創設された。「祖国の女性協会」は志願看護婦の養成を引継いだ。教会的なまた信仰にふさわしい基礎をもたない職業看護婦の教育をする最初の学校がその活動を始めた。

だが新しいディアコニー施設がうまれた。母の家ディアコニーの拡大は、広大なロシアで、ペテルスブルクと黒海の間、またバルト地方で苦難の話となった。ヴェストファーレンの牧師クーロは、グレーフィン・アンナ・フォン・アルニムと、ミンデン・ラベンスベルガーの覚醒運動によって特徴をもつようになった見習いシュヴェスターの群れを連れてきてゴスナーのエリーザベト病院を助けた。ここで、新しい母の家が開設された。[40] 他の施設には深刻な危機はなかった。

国はさまざまな要求をし始めた。1866年のプロイセンとオーストリア戦争の時、またドイツ・フランス戦争の時にディアコニッセは野戦病院奉仕をはじめ、平和になった時は、将来の動員のために出動訓練をしなければならなかった。ディアコニッセたちは最初にいた母の家の保護を出て、他の奉仕に引き離された。[41]

国はディアコニッセたちが「被雇用者」として保険に加入する義務を引きのばし、国の看護婦試験はディアコニッセ養成の中に導入された。野戦病院のためのディアコニッセの奉仕義務が加えられた。

新しい刺激に欠けることはなかった。1872年のカイザースヴェルト会議での「総会」の基調は、若きディアコニッセ施設ビーレフェルトの責任者、フォン・ボーデルシュヴィンク牧師が示した。彼は社会問

題を提示した。なお、1875年に母の家の総会では同じ問題が議事日程に記載されている。ディアコニッセたちは、たくさんの宿泊所がある労働者団地に送られねばならないのか？人は子どものそばでプロレタリアを始める。多くのディアコニー施設は病院のそばにあり、そこで神は人を受入れ、信仰とこの世との出会いを無理なく可能にしていた。ボーデルシュヴィンクは、大病院ははやくみずばらしいものになってしまうべきだと願っていた。というのは、個々の家族が病人を見る義務を肩代りしているだけだからである。断固とした決定はなされなかった。社会問題全体の奥深いところは隠されたままであった。政治や社会に対する教会の態度はすべてに災いとなって行きづまっていた。

「決定は他のものに変えられるのか？だが1871年以降内国伝道の職員たちのなかで、こまかいことにこだわる正統主義者や宗教に敵意をもつ、マルクス主義者たちに対する戦いが始まり、それは社会主義の内部で見られた。その時、人々は、社会民主主義の全体がこのキリスト教の敵側の航路をすすんでいるのではないということ、はっきりと見ていなかった。[42] だが母の家の総会がためらった態度はプロテスタントのなかにある総じて不確かなものをもう一度映し出した。」

しかし、新しい道と新しいかたちが見えてきた。ボーデルシュヴィンクは、ディアコニー共同体の中で「慈善の町」を変えた。そこで貧窮な人々やてんかん病の人たちに共に仕え、共にたたえる。このやり方で「創造的慈善」を復活させた。ボーデルシュヴィンクは病院を必要とした、だがそれは共同体の中にいる貧窮する人たちをさがし、助けることができるディアコニッセの病院を必要としたのである。さらに児童養護が十分になされ、最も貧窮した人の部屋に光がもたらされた。彼は、児童シュヴェスター、共同体シュヴェスター、そして病院シュヴェスターの中で、母の家の支所として協力する「養護施設共同体」の思想を広めた。

ボーデルシュヴィンクが喜んでベートルの看護婦長として気に入っていたエヴァ・フォン・ティレ-ヴィンクラー(1866-1930)は子どもの施設で衝撃を受け、貧困と全き信仰の服従の道に入った。16歳で堅

信礼を受けたばかりのとき、はじめて新約聖書を読んで、彼女をとらえて放さなかった善き羊飼いのたとえ話に出くわした。あなたの心は、あなたの生は、今後キリストのものであるという「深い内的確信にあふれた」。彼女自身が成長したミエコヴィツ城の台所で、半ば飢え死にしそうな価値のない子どもがごみ箱をさがして、その中に落ちるのを見たとき、道は彼女に示された。彼女の父が、故郷の共同体で貧民の病人看護のために働く機会を彼女に与えるまで時は過ぎた。彼女はもっとも貧しい者に真摯に仕えた。ベートルで修行をはじめ、帰郷して、貧民の中で悲惨な人たち、とりわけ貧しい子ども達に奉仕するために、城を出て小さな家に喜んで引っ越したに違いない。

ボーデルシュヴィンクの切実な願いで、彼女はベートルに帰った。看護婦長の仕事をやめて、招聘をうけて故郷に帰ることは彼女を重い病気にするほどであった。オーバーシュレージエンで彼女は「母エバ」となった。父の死後、100万人の後継者が認められ、彼女は最初に、愛するシュレージエンで、それから全ドイツをこえて中国、インドそしてアフリカに至るまで故郷を失った子供のために故郷の家の創設のためにあますことなく尽力した。彼女は10歳から15歳まで、それぞれの年齢の子どもたちに、陽の光と愛のあふれた住まいを与えた。インフレーションの時、彼女の偉大な能力がついに溶けてなくなってしまった時、その仕事に献身的な人たちが加入し、彼らの手で新しくされた。新しい女性ディアコニーの最も魅力的な人物であり、何千人もの人によって称賛され愛された人物は、1930年ほぼ彼女が64歳の時、家に帰って倒れた。彼女は自分が創設し、そこで700人のシュヴェスターが仕事を続けたオーバーシュレージエンのミエコヴィツディアコニッセ母の家フリーデンスホルトを残した。母エバ・シュヴェスターが宣教奉仕の中で直接中国内陸に派遣された時、この仕事の中でディアコニーと伝道は結ばれた。

福祉事業女学生 - ディアコニー協会

女性ディアコニー事業は10年ごとに拡大し、そのなかで新事業が始まった。同じように1886年にカイザースヴェルト「母の家」大祝典は母の家の総会と一緒に開催された。それは、57の母の家にある2,000以上の職場で6,366人のシュヴェスター、およそ600施設の中にある700の共同体をステーションに結びつける、すでに反キリスト教的となったドイツにかなりの程度まで活力を与えた。ディアコニッセ職は、ただひとつの女性の職にとどまっているだけではない。ドイツ女性の25%は職についている。ディアコニッセと並んで看護の独自の分野に「自由シュヴェスター」が進出し、自分たちを「正規のシュヴェスター」として社会的に認めることを求めて闘った。1886年の総会は、次のことを明らかにしている。

「私たちは今日支配的になってきたディアコニー制度の形を、私たちの時代にふさわしい、まさになくてはならないものにしようとした。それと同時に、その唯一のものが宣言されるというものでもないことも決めた。むしろ、あちこちで試み、そうして別の形もあれば、喜んで迎える。それは生ける教会の心とまた実践的な視野をもつ人々から来ていることを前提とする。」^[44]

また次のこともはっきりしている。若き女帝アウグステ・ヴィクトリアが迎えられ、1889年と1899年に「福音主義ディアコニッセ事業の専門家と友人」会議が招集された。彼女は、ディアコニッセ活動が独占にならず、指導的姿勢をもつように懇請した。社会の課題を解決するために、慈善的な女性の手は十分な活動をなしえなかった。

世紀の変わり目に「女性青年連盟」に集まった若者から内国伝道の召命を受けて働く女性たちの新しい職が生まれた。ブルックハルト牧師はベルリンでこの職業教育を引き受けた。この時、最初の福祉学校が生まれた。国は増大する福祉活動と社会福祉活動で働く女性を受け、彼女たちを女性公務員とし、終身職を提供した。^[44*]

1864年に設立された「全女性協会」から社会主義女性解放運動を排除し、そして「ドイツ福音主義女性連盟」が出来た。彼は母の家への

道を見つけなかった。だが、福音主義共同体のなかで女性援護とディアコニッセ奉仕に出会った。

19世紀の終わりに、ディアコニッセ事業の内外にある危機が明らかになった。若い女性の世代に続いてきた母の家の父権制のやりかたは難しくなった。とりわけ、教育を受けた若者が増大し、高等女学校制度が急速に進み、母の家の門をたたく人はほとんどいなくなった。

だが、ディアコニーの必要は絶え間なく増大した。多くの教会共同体は、共同体援護の出張所の設立を絶えず求めた。存続することになった新しい社会保険は強化され、ベッド数をかなり増やすようになった。近代病院の発生に貢献したディアコニー施設は、いまや嵐の発生と一緒に流されてしまう状況にはなかった。1889年第1回「福音主義ディアコニー事業の専門家と友人の会議」を行なって以来ディアコニー施設は、病院看護を縮小する運動の後退期に入った。

ここでフリードリヒ・ツィンマー教授(1855-1919)は、女性ディアコニーのための新しい道を求めた。彼はまず、その共同体シュヴェスターの大部分が活かされる小さな共同体の中で、奉仕を受け入れる牧師の働きをする女性牧師と娘牧師[Pfarrfrauen und Pfarrter]を指導して、「娘たちの家」を考えた。だが一つの職業を身につけ一生の職業とする「生涯教育」を望む若い女性の世代にある要求は総じて生活できることであった。

彼はこの可能性を病院看護職の中に見た。そこで「ディアコニー養成学校」を作ろうという案がでてきた若き少女のための、とりわけ彼女たち自身はディアコニッセ職に導かれてはいないが、ディアコニー職につく教育を受けたグループから1894年「ディアコニー協会」の形が出来た、その後、フリードナーの後継者ディッセルホフ牧師はディアコニッセ母の家で職業教育を実施する決断ができなかった。

当時ヘルボルナー説教者養成学校の校長、教授のフリードリヒ・ツィンマー博士と、エルベルフェルト町立病院の若き看護婦長アナ・マルガレット・ファン・デルデンとの出会いは、運命的な意味をもった。ツィンマーは1894年4月11日、エルベルフェルトで男女の小さなグループと「福音主義ディアコニー奉仕保障協会」(「福音主義

ディアコニー協会」と略称した)をつくった。1894年2月1日は、更に最初の「シュヴェスター女学生」が福音主義ディアコニー養成学校エルベフェルトに入ってきた。ツィンマーが予見していたよりはるかに早く、他の町の病院で別のディアコニー養成学校がはじまっていた。最初の養成を受けたシュヴェスターたちは、高等学校教育を先に受け、非常に早く新しいディアコニー養成学校で導かれたところに到達し、新しく建った市の病院の看護婦長となった。福音主義ディアコニーはその創設の10年で、すでに少なくない活動に刺激を与える女性が増加した、そして1905年には、ほぼ1千人のシュヴェスターが7つのディアコニー養成学校と別の小さな分野でその奉仕をなすことができた。

ドイツの病院の歴史において、ディアコニー養成学校は最初の専門的な一種の病院女学校となっていた。

学習、働き、ディアコニー・シュヴェスターの養成と研修の全体の重点は、このディアコニー養成学校の中にあつた。このディアコニー養成学校は「地区」のシュヴェスターの中心にある養成学校の看護婦長と共にあつた。養成学校牧師、またはディアコニー牧師は女学生たちの聖書の指導を引きついだ。シュヴェスター制度の中で、道は女学校を卒業して新卒のシュヴェスターになり、またシュヴェスターの群れからシュヴェスター連盟に導いた。堅信礼を受けたシュヴェスターはシュヴェスター制度の輪の中で形成されていった。

そこでまったく別の組織が、ディアコニー「母の家」のなかに生まれた。「母の家」のディアコニッセの娘たちは、母の家から生活に必要なすべてのものを与えられ、ディアコニー・シュヴェスターは経済的に自立していた。彼女たちは稼ぐために「奉仕する」のではない。そうではなく、「奉仕するために稼ぐ」のである。ディアコニー協会は、ディアコニー、シュヴェスターのために法によって勤務契約を結び、給料と年金を確保した。

協会と協同組合は協力し自由シュヴェスターはディアコニー協会の新しい分野を発展させた。

多数の女学生がシュヴェスター制度には加入しないで看護婦試験を

うけるだけの教育を求めて、シュヴェスター制度に加入しない多数の看護学生を教育するのに特別の課題があった。ベルリン・ツェーレンドルフにディアコニーのシュヴェスター全員のためのセンター・故郷の家がつくられた。だが、ディアコニーのシュヴェスターの中心は、その「地域」のディアコニー養成学校にあった。

ツィンマー博士は、そのあと女子教育と民族教育の新しい使命に取り組むために彼の仕事を離れた。ディアコニー協会は、それでも常に発展しつづけた。福音主義ディアコニー協会、いわゆる福音主義ディアコニーツェーレンドルフ連盟は、似たような組織のシュヴェスターの会と提携した。

1901年、補導法が発効したとき、新しい補導施設が生まれた。ここでも同じようにディアコニー、シュヴェスターがすき間を埋めた。そこでディアコニーの新しい様式が、福音主義ディアコニー協会の自由シュヴェスターの中に生まれ、それは世紀の変わり目から力強い刺激を与え始めた。[45]

12

共同体ディアコニー - 自由教会ディアコニー
宣教的な新しい調整 - ヘルマン・ベッツェル - 被造物の損傷
テーオドーア・ツェクラーとスタニスラウの施設

世紀の変わり目に強くなった共同体運動はさらにディアコニッセの家設立を始めた。それは大きな母の家をつくって競争しようとはしなかった。そこで、彼らは試された信仰と労働と、そして生活の共同体を、感謝して引継いだ。頭脳明晰な牧師クラヴィリツキイ（1866-1940）は、彼らが目ざしたことを実現した。彼は革命のことを考えたのではない。そうではなく、古いカイザーヴェルトの基礎を改革することだけを考えて。ベルンの老齢のディアコニッセの父デンドリカーはそのとき、無関心ではなかった。ヴィルヘルム・レーエが「ディアコニッセは病院のためにあるのではなく、病院がディアコニッセのためにあ

る」といったことについて、クラヴィリツキー牧師はあからさまに次のように言い切った。「ディアコニッセがまったく博士の下女であって、主の下女ではないということは、精神的墓堀人である」[46]

彼はフリードナー施設の規則に、ディアコニッセ職をひとつの「現地への宣教使命」とみなしているのをみた。すなわち「シュヴェスターは貧民、病人、そして子どものためにではなく、イエスのためにいつも魂をささげるつもりでいた」。彼はこのフリードナーの言葉を思い出し、そしてその故に喜んでカイザースヴェルトを「母の家の中の母の家」と呼んだ。

共同体運動とカイザースヴェルトのディアコニーの家との間の激しい議論は冷めていった。ヴァンズブルクの共同体シュヴェスターの家から発展したドイツ・ゲマインシャフト・ディアコニー連盟は、マールブルク / ラーンに中央本部をもち、6つの母の家を、その最も大きなものをマールブルク / ヴェルダに持ち、「ヘンソルツホーヘ」グンツェンハウスをノイエンデッテルスアウの近くに、そしてエルピングローデ / ハルツに、外国のスイスと北米になお二つの母の家を一つに結びつけた。[47]

「覚醒運動から生まれたものは覚醒運動の事業に寄与した」。全信徒祭司制はここで、ディアコニッセにも証言の権利と義務をもたせた。そこで若い少女は回心するようになり、神に召されるようになった。自分自身を救われた者だけが、救いの奉仕をなすことが出来る。やがてヴァンズブルクは増加した入会者数と、数千の自立したディアコニッセたちを示すことができた。

もう一つの共同体ディアコニッセの家は、ドイツ共同体ディアコニッセの家連盟に合併した。1885年はフランクフルト・アム・マインのメソジスト教会がディアコニッセ事業を始め、ベルリンのパプテスト教会がこれに続いた。ここで、古くから行われてきた母の家の様式を宣教に方向づける努力がなされた。自由教会ディアコニッセの家は福音主義自由教会ディアコニッセ母の家協会をつくった。このディアコニーの家は宣教する証人と牧会者とを明確に定めており、本来の伝道目的達成をあきらめることなく病院を引き受けることが出来た。彼

らはディアコニーの新しい様式を始めたのではなく、フリードナーの「母の家」の様式を堅持して、宣教的な刺激を満たした。[48]

ヘルマン・ベッツェル(1861-1917まで)は、母の家ディアコニーに、女性ディアコニー活動全体の中心としてすばらしい内的意識を与えた。ルター教会の監督は、ノイエンドッテルスアウのディアコニー施設の校長としてまたミュンヘンの長老会の長として、全ドイツの福音主義キリスト教会とまた世界ルター教会に、まだ終わりは来ていないと言って、重要な協力をした。

彼の手紙は預言者ので精神的ですばらしいものに満ちていた。彼は教会が何を体験し知るべきか、予見していた。

彼の生涯の主な時間は、2人の後継者をつくったヴィルヘルム・レーエの業績に値する。彼は預言的に母の家のことを次のように伝えている。病院と学校は彼らを引受けて、戦死者と、生きるに値しない人たちに困窮者奉仕がなされたことはない。ベッツェルは共同体ディアコニーの真の宣教的関心への手ごたえを感じていた。彼はそれによって教会闘争を準備し、新しい牧師の世代また新しいディアコニッセの世代にも影響を与えた。

「行為(を求める)説教は教養の高い人物を求めない。技術的に全てを教育するというものでもない。この教育を喜ぶのであって、時代遅れと非難するのではなく、乙女^{しゅ}たちがキリストへの誠実な愛によって、生の苦しみの中に表れる主に満たされる。大衆的な演説で、善意を吹き込み、善意を訴え、物事の理を明らかに証明して教育することはしないで、ショックを与える言葉を語るべきではない。そうではなくキリストの道を行く時に発見した愛を実行するようになり、すべてを信じるが軽はずみには信じない、すべてを望むが不注意に望むのではない、すべてを負うべきである。最後に勝利を確かなものにする人は、見かけは敗北しているようであっても、そこからなおすばらしいものを生み、しっかりした奉仕の歩みをなすことができる人である。」[49]

ベッツェルは「被造物の損傷」について疲れを知らずに語りつづけた。

「私たちは母の家の思想にそれほど打ち込んでいるわけではなかった。それを絶対に必要なもので、明らかにしなければならないと思ひ、むしろ、期待していた。また、『共同体から、共同体のために』というレーエの古代教会の理想と行為と、そこで心を和らげて内密にできる土地で、国中にいて故郷を思って働くディアコニッセのつながりを純粋に親密なものにしようと思った。」「[50]

ベッツェルが「活動するディアコニー」について強調したことは、ガリツィアにおけるテーオドーア・ツェクラーの比類のないライフワークに具体的にあらわれた。1891年、彼はユダヤ人宣教の仕事で、死んだような福音主義の移民ガリツィア人がいるスタニスラウにきた。彼と、すべてをささげた彼の伴侶は、みずぼらしいドイツ人開拓者の中にいる孤児を気の毒に思った。「ツェクラーの施設」は奇形の子[sieche Kinder]と長患いの子のための避難所でもあるディアコニッセ母の家サレプタの中心となった。数々の看護ステーションは一つの輪となった。

第1次世界大戦はこの事業を脅かした。ツェクラーは戦争と革命の混乱の中で、彼をオーストリアにあるディアコニッセ施設の母のように受け入れ、いつでも彼の仲間とスタニスラウに帰って来てよい避難所のガルネン教会に3度移動した。

彼のシュヴェスターたちはこの脅かされた移民の中で女宣教者、女説教者になり、学校をもち、悲惨な人たちへの奉仕に目をとめる以外のことはしないで、分散したグループを集めた。スタニスラウの施設の祝祭は教会の祝祭である。一人のディアコニッセが働くところ、そこには教会がうまれた。ツェクラーはガリツィア移民教会の長となった。第1次世界大戦後の困窮の時代に、彼はユダヤ人とドイツ人とポーランド人とウクライナ人のために世界教会の援助事業を行った。福音主義の覚醒がウクライナ人たちに起こった。

そこで、ディアコニッセ施設の課長は、貧困者の母の家と「成人した娘たち」と弱ったシュヴェスターを創造性豊かな教会とディアコニーの実り豊かな関係の中で育てた。[51]

回顧と展望

ふりかえってみよう。時代は新しく変わっても女性の奉仕はひとつの道、犠牲に満ちた道、恵まれた道を、絶えざる新しい変化の中で、困窮によって決して自由ではなかったが、教会のなかに実現した。テオドーア・フリードナー、ヴィルヘルム・レーエ、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク、ヘルマン・ベッツェルのような人たち、そして学長ツィンマー教授のもとにいる無名の人たち、このような忘れられない人々が、福音主義女性のディアコニー事業を特徴あるものにした。なお女性ディアコニーのこの歴史は、決して男性の歴史だけではない。福音主義キリスト教世界の女性ディアコニーが賜ったものは、エヴァ・フォン・ティレヴィンクラーと他の女責任者といった、有名であったり無名であったりする女性自身の奉仕によって、大いに出てくるようになった。ディアコニッセの質素な着物、自由な福音主義シュヴェスターと助手のディアコニー・シュヴェスターの衣服、福祉の世話をする人、幼稚園の教師、寮長、内国伝道の数え切れないほどの仕事をする職業女性、共同体のヘルパー、教理を教える女教師、パイプオルガン奏者、この人たちがこれらの制服を身に着けた。

キリスト教ディアコニーの中でその種々の形を受け取ってきたすべての女性活動のいわずもがなの仲間たちは、ディアコニッセ奉仕であり続けた。

ベッツェルは「あちこちのディアコニッセの家」を「教会の宝物庫」と呼んだ。それによると主導権を所有しているわけではない。その形態の変容はいつも新しく獲得された「拘束と自由」という秩序の中で検証されたものをおろそかにせず、また新しいことを見逃さず常に進行し続けている。